

メディア・イベントの視聴構造

「結婚の儀報道」をめぐる

川上善郎

A Case Study on TV Viewing of the Royal Wedding

Yoshiro Kawakami

【はじめに】

1993年1月6日「皇太子妃内定」のニュースは、意外性の高い衝撃的なニュースとして多くの人々に受け止められた(川上善郎 1993)。しかし、マスコミ関係者の間では、皇太子妃内定は前年の暮れごろから周知の事実であり、問題はいつ「報道協定」を解くかという一点にあったという(丸山昇 1993)。「報道協定解除」の直接的なきっかけは、アメリカのワシントンポスト紙最終版に皇太子妃決定が小和田雅子の実名入りで報道されたことにある。しかし、報道協定解禁の予告は、当日の午後6時にはすでにマスコミ各社に流されていたにもかかわらず(丸山 1993、総合ジャーナリズム研究 1993)、報道協定の解禁時間は2時間30分以上もあとに設定された。午後8時45分になって、テレビを中心とするマスメディアが一斉に報道を始めたのである。1日のうちでテレビ視聴世帯がもっとも多い時間帯は、午後8時30分から9時の間(NHK 世論調査部 1991)であり、明らかに報道協定解禁の時間設定をするにあたっての根拠は、視聴者に早く伝えることにはなく、多くの視聴者にいかに劇的に伝えるかであったのである。そのために、わざわざ放送中の番組を中断し、あたかも突発的なニュースが

起こったかのように「臨時ニュース」という形で放送されたのであった(注1)。皇太子妃内定という事実の報道ではなく、皇太子妃内定ドラマを演出しようというのである。H. G. ウェルズの「宇宙戦争」をもとにしたラジオドラマの中で、火星人の侵入を伝える「臨時ニュース」を聞いて、本当に火星人の侵入が始まったと錯覚しパニックになったという話がある(川上善郎 1990)。パニックをおこさせるような真実味を生みだしたのは「臨時ニュース」にあった。国民の知る権利を明らかに踏みじめる報道自粛(亀井淳 1993)から視聴者の目をそらし、皇太子妃内定報道をより劇的に演出するための小道具がこの「臨時ニュース」であった。本来ならば「ニュース」として速やかに伝えられるべき事柄をも劇的效果などを考えて演出してしまうメディアの姿勢は、その後の「皇室報道」に一貫してあらわれている。小田桐(1993)は、マスメディアの当日の報道行動をメディアの側からあとづけ、皇太子成婚のメディアイベントを「報道と祝賀が混沌とした皇太子結婚狂奏曲」としてとらえている。

皇太子成婚というイベントは、地震や暗殺といった突発的に起こる出来事と異なり、あらかじめ日時や行なわれる事柄が確定した出

来事である。しかし、これらの出来事に直接的に参加できる人々の数は社会的、空間的、時間的に限定され、ごく一部の人々に過ぎない。メディアによるイベントの中継は、多数の人々にこの出来事を広く知らせることができているので、メディアは受け手への最大限の効果を考えて報道することができる。現実に行われるイベントをいく台ものカメラで切りとり、それらを再構成することによって、実際以上に「現実」に近い姿を視聴者に伝えることが可能となる。特にパレードなどの中継においては、現実のイベントに参加した人が感じる以上にパレードに「参加」した感じを与えることができるだろう。現実の多数のイベント参加者は「人の頭だけしか見えなかった」のに対して、メディア視聴による参加者はイベントの細部から全体像まで詳しく把握することができた。さらに、国民の大多数が現実のイベントの進行にあわせて「今」同じ画面を見ているという認識は、みんながひとつのイベントに参加していると考えさせるための重要な要素である。そのためには、1%でも多くの人々が「今」テレビ視聴に向かっていて事実を作り上げることが必要なのである。単にメディアが「イベント」を中継しているのではなく、進行している出来事とそれを伝えるメディアとその視聴者をも含めて全体が「イベント」なのだと感じさせるのである。このような「イベント」をここではメディアイベントとよんでおこう。

本研究は、大学生という限られた対象ではあるが、当日の一日のテレビ視聴を調査し、「皇太子成婚」というメディアイベントに対する調査対象者の視聴行動の特徴、メディア視聴の質、メディアイベントへの態度などを明らかにする。さらに、どのような個人的な特徴がメディアイベントへ向かわせたのかを実証的に検討するものである。

【調査方法】

調査は、1993年6月11—17日の間に実施された。調査方法は、大学の授業時に調査表を配布し一斉に実施する集合調査法を用いた。調査所要時間は15分程度であった。調査対象者は大学生である。有効回収数は、5大学512名であった。調査対象者の内訳は、男性326名(64%)、女性186名(36%)、1年生146名(29%)、2年159名(31%)、3年154名(30%)、4年46名(9%)、不明7名(1%)である。また、調査実施大学は、文教大学(48%)、横浜市立大学(18%)、東京大学(10%)、明治大学(15%)、常盤大学(10%)であった(注2)。

主要な調査項目は次の通りである。

- (a) 当日のテレビ視聴行動
一日のテレビ視聴行動と外出行動
結婚の儀、朝見の儀、パレード中継番組の視聴行動等
- (b) 結婚の儀関連番組の評価
視聴の強度、感動度、好感度、興味度、メディアに対する評価
- (c) ニュースとしての重要度の評価
- (d) 結婚の儀に関するコミュニケーション行動とメディア接触行動
- (e) 結婚の儀に関する関心度と母親、父親、友人、日本国民の関心度の認知
- (f) 皇太子・皇太子妃に対する好感度
- (g) 皇太子、小和田雅子、皇室、結婚についてのうわさへの接触経験(注3)
- (h) 日常のマスコミ接触度と個人属性(性、学年、年齢、住居)

本報告では(a)(b)(e)(f)についての結果を中心に扱う。その他の結果については、うわさとニュースの研究会(1994)(注4)に詳しい。(a)の当日のテレビ視聴行動は、調査表に1時間単位の24時間スケールを用意し、テレビを視聴した時間に線をひいてもらうことによって測定した。その際に結婚の儀関連の番組に

は二重線で、その他の一般の番組には実線で回答してもらった。また外出行動についても外出時間について実線で回答を求めた。

[結果と考察]

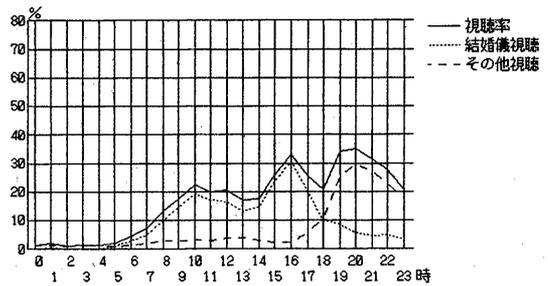
1. 当日のテレビの視聴行動について

当日は、早朝5時45分(TBS)に始まり、6時には、在京6局(NHK教育をのぞき)の結婚の儀関連の特別番組が勢ぞろいした。当日のテレビ番組欄から確実に結婚の儀と関係のないと考えられる番組(ニュース、ワイドショーは結婚の儀関連とした)を朝6時から午後9時までの間に限ってチェックし、その放送時間を求めたところ、日本テレビは、午後7時から9時のプロ野球巨人ヤクルト戦の2時間、TBSは0時間、フジテレビは2時間、テレビ朝日は1時間、テレビ東京は、午後7時から9時のサッカーJリーグ、グランパス対ヴェルディ戦を含めて8時間30分であった。これら6局の延べ総放送時間90時間(15時間×6局)に対し結婚の儀関連番組が実に76.5時間85%を占めていた。また、朝6時から午後9時までの間に、6局の内3局以上が同時に結婚の儀関連番組以外の放送をやった時間数は、13:30—14:00の30分間だけである。また、2局がそれ以外の放送をやっていた時間は、3時間15分であった。逆にすべてのチャンネルが結婚の儀関連番組を流した時間数は5時間20分であった。この日の15時間の放送時間のうち約35%は、どのチャンネルをまわしても結婚の儀関連の番組しか見られなかったことになる。

結婚の儀関連番組は「リアルタイム」で見てこそ意味があった

図1は、当日のテレビ視聴行動を、結婚の儀関連番組とその他の番組に分けて示したものである。実線は両者をあわせた全体の視聴率を示している。結婚の儀関連番組の視聴率(点線)は、「結婚の儀」が始まった午前10時

図1 93年6月9日のテレビ視聴率の推移

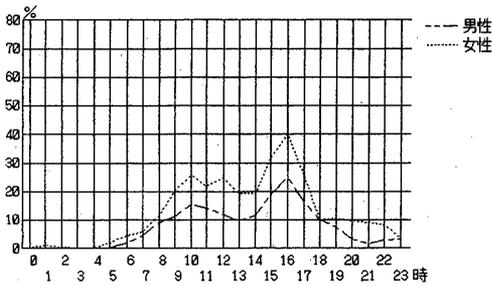


に19%、その後は15%前後を推移する。また「朝見の儀」が行なわれた午後3時には24%、「パレード」の始まる午後4時台には31%とその日の最高を記録した。このようにイベントのある時間帯に多くの視聴が集まっている。一方、その他の番組については(破線)、中にはきわめて低い。上に述べたようにその他の番組がほとんど放送されなかったから当然である。しかし、午後6時になって11%と結婚の儀関連番組と拮抗し、午後7時25%、午後8時には30%と高い視聴率を示した。この時間帯は、在京6局の内4局は相変わらず特別番組を放送していたが、男女とも結婚の儀関連番組を避け(図2参照)、野球とサッカーにチャンネルをあわせたのである。このように結婚の儀関連番組の視聴は、イベントの進行した時間帯に多く見られたと言えるだろう。

結婚の儀関連番組の視聴率は、女性の方が一貫して高かった

図2は、男女別に結婚の儀関連番組の視聴率の推移を示したものである。どの時間帯をとっても、男性より女性の視聴率が高い。とくにイベントが進行している時間帯では顕著である。例えば「結婚パレード」では、女性40%、男性25%と女性が15%も上回っている。また7時以降の視聴についても、女性は10%を越えている。このように当日の結婚の儀関連番組の視聴では、女性が一貫して男性を上

図2 結婚の儀関連番組の視聴率の推移 (男女別)

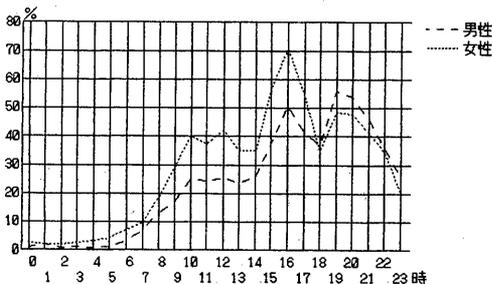


回っていた。

在宅していた女性の70%、男性の50%が「結婚パレード」を見た

図1、図2で示した視聴率は、全調査対象者に対するテレビ視聴者の割合であった。当日のテレビ視聴の実際をさらに詳しく知るために、当日の時間別に対象者の外出行動(外出率については注5参照)を調査した。午後12時から午後18時までの外出率は男女とも40%前後と高い。在宅していた対象者は6割弱といったところである。外出している場合には、テレビ視聴をしていなかったと仮定し、在宅者についてだけテレビ視聴率(その他視聴を含む)を算出した。図3に示すように、在宅率をベースにしたテレビ視聴率は、図2の結果よりもかなり高くなり、「結婚パレード」が開始された午後4時台では女性で実に71%を記録し、男性でも51%であった。在宅

図3 在宅している対象者のテレビ視聴率 (男女別)



している対象者に関して言えば、かなりの割合で「結婚パレード」を見たことが明らかになった。また、図から明らかなように午後6時を境目にして男性と女性の視聴率は逆転している。

この日は結局どのくらいの時間、テレビを見つけたのだろうか

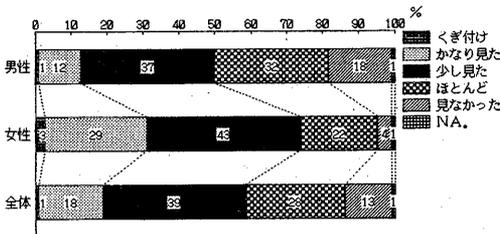
当日にテレビ視聴をしたものについて視聴時間を求める(注6)と、男性4.62時間、女性4.91時間($F=1.36$, $p=n.s.$ $N=433$)とやや女性が多いが、男女間に統計的な差はみられない。当日にテレビを見なかった人数は男性に多かった。男性でもテレビ視聴をした人は、女性と同じ程度にテレビを見ていたことになる。しかし、結婚の儀関連番組では、男性2.30時間に対して女性3.23時間($F=14.1$, $p<0.01$ $N=433$)と1時間程度女性が長い。逆にその他の番組は、男性2.32時間に対して女性1.68時間($F=8.45$, $p<0.01$ $N=433$)と男性の方が長時間であった。

「結婚パレード」を見に行った人は女性の6%だった

以上の結果は、時間別のテレビ視聴行動であるが、「結婚パレード」視聴についてももう少し詳しく結果を述べる(注7)。「結婚パレード」を調査時点まで見ていないものは、24%(男性33%、女性8%)であった。男性の3割、女性では1割弱である。他方、「結婚パレード」を直接見に行った人は全対象者の4%(女性6%、男性2%)ほどいる。「生中継で見た」人は、43%(男性37%、女性53%)である。「当日のその後の番組で見た」は、20%(男性18%、女性23%)、「当日以降の番組で見た」9%(男性10%、女性9%)であった。「結婚パレード」を「現場」で、あるいは「生中継」で見た人は、46%(男性39%、女性59%)と高率であった。

図4は、結婚の儀関連番組をどの程度見た

図4 結婚の儀関連番組をどの程度見ましたか



かという問の結果である。高い視聴率を示していた割に、その視聴態度はあまり熱心なものではないようだ。「くぎ付け」になったのは、1.4%（男性0.6%、女性2.7%）と極端に少なく、「かなり見た」も18%（男性12%、女性29%）と少ない。「少し見た」、「ほとんど見ない」と答えたものが実に67%と3分の2以上を占めている。この結果は、多数の対象者が長い時間見た割には、熱心に視聴した対象者は男女ともにたいへん限られていたことを示している。しかし、当日の異常な結婚の儀関連番組の占有率から言うならば、結婚の儀関連番組の視聴時間数は、確かに「少し見た」「ほとんど見ない」に該当してもおかしくはないだろう（注8）。

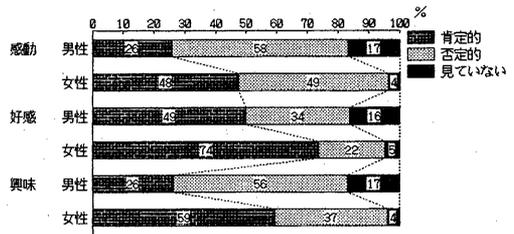
2. 結婚の儀関連番組の評価

次に、結婚の儀関連番組を見ての評価について述べる。テレビ視聴によるイベントへの参加は、どの程度の感動や好感、興味を与えたのか。また、メディアを中心にくりひろげられた異常な報道合戦や、すでに述べたように、どのチャンネルも同じような内容の番組を流すことについて、どのような意見を持っているか明らかにしよう。

結婚の儀関連番組は「感動」よりは、「好感」を与えるのに成功した

結婚の儀関連番組をみての感想を、まとめて図5に示す。ひとことで述べるならば、女性は男性よりも全般的に肯定的な感想を持つ

図5 結婚の儀関連番組を見ての感想（男女別）



たと言えるだろう。いずれの項目でも、ほぼ男性の倍以上の数字を示している。テレビ番組を見て「感動したもの」（「感動した」、「やや感動した」）をあわせた数字。図中では肯定的と表示）は、男性26%、女性48%である。「感動しなかった」ものが男女ともに上回っている。「好感を持った」ものは、男性49%、女性74%といずれも「好感を持たなかった」を大幅に上回っている。テレビは視聴者に幅広く好感を与えることに成功している。また、「興味を持った」ものは、男性26%、女性59%と男女で大きく差がある。男性は「興味を持たなかった」ものが過半数を越えたのに対して、女性では「興味を持った」ものが過半数を越えている。このように、女性は、テレビ視聴を通して、「好感」「感動」「興味」を感じたが、男性は「好感」を持ったが「感動」「興味」は感じなかったと言えるだろう。

テレビ中継を見て、約半数は「騒ぎすぎ」と感じ、8割は同じような番組の垂れ流しに批判的であった。

当日のテレビ中継は、早朝から夜間まで、結婚の儀関連番組を中心とした非常に偏りのある番組編成であった。このようなメディアの在り方について、対象者は「騒ぎすぎ」「やや騒ぎすぎ」と答えたものが56%（男性51%、女性60%）、「騒ぐのは当然」38%（男性30%、女性41%）、「その他」「見ていない」17%（男性18%、女性9%）であった。騒ぎすぎと考えるものがある一方で、騒いでも当

然という意見もかなりの割合を占めている。しかし、どの局もほとんど同じような番組を流すことについては、「好ましくない」「あまり好ましくない」をあわせて76%（男性73%、女性82%）である。肯定的な意見は14%（男性14%、女性14%）に過ぎない。熱心に視聴した女性の方に否定的な意見が多い。テレビが類似した内容の番組を流すことに対する批判はかなり強いものがある。

3. 結婚の儀への関心の強さと皇太子・皇太子妃に対する好感度

結婚の儀に関して対象者はどの程度関心を持っているのか。また、自分の周囲の友人たち、父親、母親、さらに、日本国民はどの程度この行事に関心を持っていると対象者は考えているのか。結婚の儀に関して、誰がもっとも強い関心を持っていると対象者は考えているのだろうか。

自分自身の関心は世間の人に関心にくらべてかなり低いと思っている

図6、7は、「結婚の儀」に関する自分自身の関心の強さと、周囲の友人、父親、母親、さらに日本国民の関心の強さを答えさせたものである。

図6は、男性の結果である。「関心がとてもある」から「少しある」までの数値の和の大きい順に示したものである。日本国民は

図6 結婚の儀に関する自分自身の関心と世間の関心(男性)

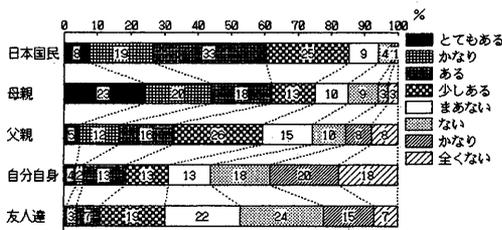
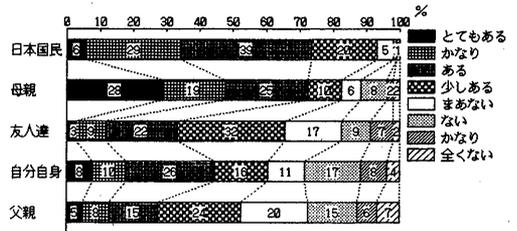


図7 結婚の儀に関する自分自身の関心と世間の関心(女性)



85%、母親74%、父親59%、そして自分自身32%、友人31%である。母親と日本国民は合計した数値は近いが、母親では「とてもある」がたいへんに多い。自分と友人の関心度はたいへんに近いところにある。

図7は、女性についての同様の結果である。日本国民93%、母親81%、ついで友人66%、自分自身60%、もっとも関心が低いとみなされているのは父親で、27%であった。女性の場合にも母親は「関心がとてもある」がたいへんに多い。自分と友人の関心度は近い。

女性は、この行事に対しとても強い関心を持っていること、男女ともに、「日本国民」はこの行事に強い関心があると認知していること、その中でも母親はとくに強い関心を持っていること。さらに、両性とも友人は自分自身とほぼ類似した位置にいると考えていることなどが明らかになった(注9)。

皇太子に対し好感を持っているもの(「好感を持っている」「まあ好感を持っている」をあわせた数字)は、男性64%女性77%である。これに対して皇太子妃については男性77%女性96%である。このように、男性よりも女性が、また皇太子に対するよりも、皇太子妃に対する好感度が高い。とくに女性において、その傾向は顕著である。他方、好感をもたないもの(「ほとんど好感を持っていない」「あまり好感を持っていない」をあわせた数字)は、皇太子については男性34%女性

23%である。これに対して皇太子妃については男性22%女性4%であった。皇太子妃にたいする好感度はとても高いようだ。

4. 「結婚の儀」テレビ視聴の構造

結婚の儀関連番組といっても、朝の10時から開始された「結婚の儀」、午後3時の「朝見の儀」、そして5時過ぎに終了した「結婚パレード」まで多様であり、人によってその見方は多様であったはずである。ある対象者は結婚パレードだけ視聴したかもしれないし、他の対象者は午前からの視聴だったかも知れない。結婚の儀関連番組の視聴行動相互の関係はどうなっているのか。また、視聴行動と番組を見ての評価や、メディアに対する評価とどのような関係にあるのか。当日の結婚の儀関連番組の視聴行動の構造を明らかにしたい。

同時に、そこで明らかにされる視聴行動の構造は、対象者のどのような特性から説明されるのか。結婚の儀に対する本人の関心の強さや他者の関心の認知とか、皇太子に対する好感度や皇太子妃に対する好感度が視聴行動の構造をどのように説明するのか。これらの要因に加えて、本論文では紙数の関係で触れえなかった結婚の儀のニュース価値の認知(注10)、パーソナルコミュニケーションで話題としてとりあげた経験(注11)、さらに結婚の儀についての情報探索行動(注12)、ふだんのマスコミュニケーション接触行動やデモグラフィック要因を用いて上記の視聴行動の構造を説明するために、正準相関分析(柳井晴夫他、1985)を行なった。基準変数としては、当日のテレビ視聴行動に直接関係する変数9項目を用いた。また、説明変数としては、性、年齢、住居などのデモグラフィック要因を含めて表1に示す23項目を用いた。

当日のテレビ視聴行動の第1成分は、「奉祝一色」のテレビ視聴

統計的に有意であった2成分について構造係数を表1に示す。

表1 正準相関分析の結果(構造係数)

変数名	成分 1	成分 2
[説明変数群]		
PKOのニュースより価値	-0.1417	0.2476
留学生射殺より価値	-0.1445	0.1515
Jリーグより価値	-0.3566	0.0447
政治改革より価値	-0.3129	0.1935
友人と話題になる	-0.4024	-0.0578
自分から話題にする	-0.4166	-0.1888
家族と話題にする	-0.3898	-0.1473
新聞で関連記事を読む	-0.4055	-0.2741
週刊誌で関連記事を読む	-0.3600	-0.1113
スポーツ新聞で読む	-0.2951	0.0867
関心ある	-0.9509	-0.1019
母関心ある	-0.3772	-0.0915
父関心ある	-0.2920	0.0512
友人関心ある	-0.5598	-0.0631
国民関心ある	-0.3681	0.0399
皇太子に好感	-0.5352	0.3497
皇太子妃に好感	-0.6194	0.3369
新聞よく読む	-0.0440	-0.2381
TVニュースよく見る	-0.1703	-0.5670
テレビよく見る	-0.0079	-0.4083
性別	0.4080	0.3228
学年	-0.0311	0.0337
住居	-0.0093	-0.0331
[基準変数群]		
結婚の儀	-0.5705	-0.4808
朝見の儀	-0.5644	-0.3974
結婚パレード	-0.6089	-0.4316
よく見た	-0.6929	-0.5480
感動した	-0.8131	0.0228
好感を持った	-0.8027	0.2754
おもしろかった	-0.8363	0.0542
騒ぎすぎである	0.4389	-0.4770
同じ番組好ましい	-0.5114	0.4237
正準相関係数	0.8326	0.4878

正準相関係数は0.82と高い。基準変数群は、用いた変数のすべてに高い負荷量を示している。結婚の儀関連番組を見た感想として「興味を持った」(-0.84)「感動した」(-0.81)「好感を持った」(-0.80)「関連番組を一生懸命に見た」(-0.69)「パレードの中継を見た」(-0.61)「結婚の儀の中継を見た」(-0.57)「朝見の儀を見た」(-0.56)、さらに、「メディアは騒ぎ過ぎではない(注13)」(0.44)「同じ様な番組好ましい」(-0.51)

などすべての項目に高い負荷量を示している。これらのことから、基準変数の第1成分のマイナス側は、積極的なテレビ視聴行動、メディアの報道姿勢に対する肯定と、テレビ視聴後のポジティブな印象の形成を示していると言える。

これらの構造を説明する要因として、もっとも大きいのは、結婚の儀に関する本人の関心の強さ(-0.95)であり、皇太子妃に対する好意的な態度(-0.62)、友人の関心(-0.56)、皇太子に対する好意的な態度(-0.54)。さらに、友人に自分から話題にする(-0.42)友人と話題にする(-0.40)家族と話題にする(-0.39)などの活発な対面的なコミュニケーション活動、新聞(-0.41)、週刊誌(-0.36)などの情報探索活動、さらに、結婚の儀のニュース価値として、Jリーグ(-0.36)や政治改革(-0.31)のニュースよりも価値があるとする。デモグラフィック要因では、性別(-0.41)のみが高く、「女性」に関連が強いことを示している。

当日のテレビ視聴行動の第2成分は、「メディア批判」の醒めたテレビ視聴

第2成分は、正準相関係数は、0.48と第1成分よりかなり低くなる。基準変数については、テレビ視聴後のポジティブな感想は関連がない。第1成分と同様に「関連番組を一生懸命見た」(-0.55)「結婚の儀の中継を見た」(-0.48)、「パレードの中継を見た」(-0.43)「朝見の儀を見た」(-0.40)が高い。メディア評価については、第1成分と全く逆に「メディアは騒ぎ過ぎである」(-0.48)、「同じ様な番組好ましくない」(0.42)とネガティブな評価が与えられる。このように第2成分マイナス側は、結婚の儀関連番組をよく見たが、メディアの報道に対して否定的な態度を持っていることを示している。

また、説明変数として高い負荷量を持つ項目は、ふだんから「テレビニュースをよく見

る」(-0.56)、「テレビをよく見る」(-0.41)など日常的なテレビメディア接触行動と、「皇太子に否定的な態度」(0.35)、「皇太子妃に対する否定的な態度」(0.34)を持っていること、さらに性別(-0.32)では、第1成分と同様「女性」に関連が強いことを示している。

このように当日の積極的なテレビ視聴の構造は二元的である

このように、結婚の儀関連番組の当日の視聴行動に大きく2つの視聴次元があることが明らかになったと言える。2つの次元は、おもしろいことに、いずれも積極的なテレビ視聴行動を説明する次元であり、その上いずれの次元も女性に関連しているのである。

第1の次元でのテレビ視聴行動は、結婚の儀に対する強い「関心」からもたらされるものであり、皇太子・皇太子妃に対する好感、結婚の儀について友人や家族との話題として積極的に取り上げたり、パーソナルなレベルで自分から話題として話した経験を持つ。テレビ以外にも新聞や週刊誌を「情報検索」し、「ニュース価値」があると考ええる。その結果として、積極的にテレビ視聴を行なったのである。まさに、メディアがもくろんだ「奉祝一色」のテレビ視聴行動そのものといったところである。

これに対して第2の次元は、第1の次元と同様、女性の積極的な視聴行動を説明するのだが、ふだんからテレビへの積極的な態度を持つ対象者が、結婚の儀に関しても積極的に視聴したことを示す。この次元では、メディアの報道姿勢に対する批判やマスコミの騒ぎ過ぎにたいする批判が明確に意識されており、さらに、皇太子・皇太子妃に対する否定的な態度とも結びついている。男性は、結婚の儀関連の視聴行動が低いために、いずれの次元でも女性の反対側に位置しておりはっきりした特徴がみられない。男性のみの正準相関分

析では、統計的に有意な成分として、視聴行動量の大小を示す一次元の単純な構造が求められた。単純に結婚の儀関連番組をたくさん見たかどうかという次元だけで説明されている。

本研究の結果が示すように、「結婚の儀」と呼ばれる「メディアイベント」に積極的に関わったのは明らかに女性であり、そのことは、本論文の単純集計にもはっきりと示されている通りである。しかし、全ての女性が同じように視聴したのではなく、本研究が示すように、高い女性の視聴率は、「奉祝一色」のテレビ視聴者と、「メディア批判」の醒めたテレビ視聴者とが、ともにメディアイベントに参加することによって形成されていたと言えるだろう。

[注]

注1. 報道開始後1時間15分後の午後10時までに調査対象者の62.9%がこのニュースを知るに至っている。皇太子妃決定ニュースに関しては、川上善郎(1993)に詳述されている。

注2. 調査表の設計、調査の実施にあたっては、川浦康至(横浜市立大学)池田謙一(東京大学)古川良治(常盤大学)諸氏の協力を頂いた。

注3. 以下に皇太子・皇太子妃・結婚・皇室に関するうわさを聞いたことがあると答えたものの割合を示す。皇太子妃に関するうわさは、広範囲に語られたことが分かる。皇太子に関するうわさがもっとも少ない。いずれも女性の方が高い割合である。

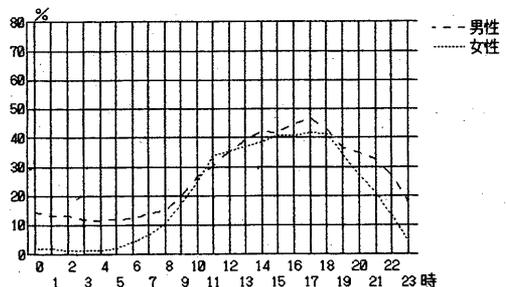
	全体	男性	女性
小和田雅子に関するうわさ	44.7	35.0	61.8
皇太子に関するうわさ	29.1	24.8	36.6
皇太子結婚に関するうわさ	42.8	37.7	51.6
天皇や皇室に関するうわさ	34.6	24.5	52.2

(数字は% n=512)

注4. うわさとニュースの研究会(代表川上善郎)は、情報社会でのニュースやうわさの伝達を研究するものである。突発的なニュースの発生に対応するために、パソコン通信を用いて、調査表の検討や調査表の配布を行っている。すでに、「エイズとうわさ」、「宮沢りえ・貴花田婚約ニュース」、「皇太子妃決定ニュース」、「宮沢りえ・貴花田婚約解消ニュース」、「ロシア軍最高会議ビル突入ニュース」に関してニュースの伝播とパーソナルコミュニケーションという観点から調査を行なっている。

注5. 付図は、時間別の外出率を示す。男性では深夜早朝の時間帯でも10%以上の外出率である。午前9時頃から外出が始まり、午後4時43%、午後5時には45%に達する。

付図 93年6月9日の時間別外出率(男女別)



注6. 回答記入の方法から、テレビを見ていなかったものと無回答者とを区別できない。ここでのテレビ視聴時間は、当日テレビを見たもの(行為者)についての平均値である。一般にはテレビ視聴時間は、見ていないものを含めて平均時間を用いるのが一般的であるようだ。

注7. 「結婚の儀」「朝見の儀」「結婚パレード」については、「生中継で見た」「当日の

その後の番組で見た」「当日以降の番組で見た」「見ていない」を選択肢として質問している。下に結果の一部を示すが、同時進行の形で見た視聴者は、「パレード」に特に多かったことが言えるだろう。ここで数字は、本文中の時間別の視聴率と大きく異なって高い。時間別では、午後4時台で29.5%であるのにたいして下表では42.8%と10%以上高い。ひとつには調査方法の違いがあるが、主たる理由は、パレードが4時台、5時台にまたがっており、時間別では別の時間帯として集計されるためである。

	生中継 で見た	後の 番組で	当日 以降	見て ない	NA
結婚の儀	26.8%	34.0%	8.2%	30.9%	0.2%
朝見の儀	20.9%	26.2%	7.0%	45.5%	0.4%
パレード	42.8%	19.9%	9.4%	23.8%	0.6%

(パレードについては現場で見たが3.5%)

注8. 「くぎづけになった」と答えた人の結婚の儀関連番組の平均視聴時間は10.0時間 (n=7)、「かなり見た」4.7時間 (n=93)、「少し見た」2.4時間 (n=198)、「ほとんど見なかった」1.1時間 (n=145)、「見なかった」0.1時間 (n=66)であった。5時間以上の視聴をしないと「かなり見た」とは感じない状況であったことが、この結果から言えるのだろう。

注9. 因子分析結果では、「自分自身の関心」「友人の関心」「国民の関心」が第1因子、「父親の関心」「母親の関心」が第2因子となった。このことから、自分自身の関心の強さは「友人」「国民」の関心の認知と関連する。すなわち、関心の強い人ほど、友人や日本国民も関心が強いと考える傾向にある。これに対して、両親については、自分の関心の強さとは独立して判断されてい

る。

注10. ニュース価値の認知は、次の4つのニュースと比較させたものである。結婚の儀のニュースの方が重要としたものの割合は次のとおりであった。ほぼ政治改革のニュースと同程度の重要度といったところであろうか。

	全体	男性	女性
PKOでの日本人殺害のニュース	17.6	20.9	11.8
日本人留学生射殺事件の裁判のニュース	25.8	31.0	16.7
Jリーグ開幕のニュース	70.7	64.4	81.7
政治改革のニュース	49.8	51.5	46.8

(数字は% n=512)

注11. 結婚の儀についてのパーソナルコミュニケーション経験は、次のとおりである。男女とも友人の間で、結婚の儀が話題になったこと、また、家族ともある程度は話題になったことが読み取れるだろう。いずれも女性にとくに顕著である。

	全体	男性	女性
友人と話題になった	54.5	43.9	73.1
自分から話題にした	38.1	29.4	53.2
家族と話題になった	44.5	33.1	64.5

(数字は% n=512)

注12. 結婚の儀について詳しく知るために「新聞」、「週刊誌」、「スポーツ新聞」へ接触したかを調査している。

注13. 「」内の表現は、マイナスの方向での意味解釈にあわせて表現している。

参考文献

文芸春秋(編)「外国報道に見る御成婚」文芸春秋社、1993

- 亀井淳「皇太子妃報道の読み方」岩波書店, 1993
- 川上善郎「拡大する情報環境」齊藤耕二・菊池章夫編「社会化の心理学／ハンドブック」川島書店, 1990
- 川上善郎「ニュースの伝播過程に関する研究」文教大学情報学部情報研究, 第14号, 85-104, 1993
- 川上善郎、川浦康至、池田謙一、古川良治「ニュースの伝播過程に関する研究」第34回日本社会心理学学会大会論文集, 1993
- 川上善郎、川浦康至、池田謙一、古川良治「電子ネットワークの社会心理」誠信書房, 1993
- 川上善郎、岡山慶子、松田美佐「『エイズとうわさ』調査報告書」, 1993
- 国家と儀礼研究会編「雅子の真実」社会評論社, 1993
- 丸山昇「皇太子妃とマスメディア」第三書館, 1993
- 松田美佐、岡山慶子、川上善郎「エイズとうわさーうわさから見える不健全な他者ー」第34回日本社会心理学学会大会論文集, 1993
- 三上俊治「『ご結婚報道』が皇太子夫妻のイメージに与えた影響」, 1993年度マスコミュニケーション学会発表資料, 1993
- 水野博介「皇太子結婚報道の実態と影響に関する実証研究」, 1993年度マスコミュニケーション学会発表資料, 1993
- NHK 放送文化研究所世論調査部「国民生活時間調査報告書」, 1991
- 小田桐誠「これでいいのか皇室報道」創 8月号, 72-89, 1993
- うわさとニュース研究会編「『ロシア軍最高会議ビル突入』ニュースの流れに関する調査報告書」, 1993
- うわさとニュース研究会編「『結婚の儀』に関する調査報告書」, 1994
- 柳井晴夫、高木廣文編「多変量解析ハンドブック」現代数学社, 1986